

信者の生活ルール

□はじめに

1. 私たち信者が、信者になる前の自分と比べて、変わったと言えるのは、霊的な生き方ができるようになったという点である。
 - (1) 信者になる前は、「自分の背きと罪の中に死んでいた者」であり、「かつては自分の肉の欲のままに生き、肉と心の望むことを行い、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。」(エペソ 2 : 1~3 抜粋)
 - (2) 「しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、背きの中に死んでいた私たちを、キリストとともに生かしてくださいました。あなたがたが救われたのは恵みによるのです。」(エペソ 2 : 4~5)
 - (3) 私たちは霊的に死んでいた者であるが、神がキリストを墓の中でよみがえらせたように、神は私たちを霊的に生かしてくださいました。私たちは霊的に生まれたので、霊的な生き方ができるようになったのである。

2. 聖書が「霊的 (英語では、スピリチュアル)」というとき、そこには 3 つの要素がある。新生、聖霊、時間である。
 - (1) 第一の要素は、新生。霊的に新しく生まれること
 - ① これは、「救いを受ける」、「義と認められる」、などとも表現する。
 - 救いを受ける・・・私たちが「生まれながら御怒りを受けるべき子ら」であったことと関係する表現。生まれながらの人はすべて、永遠の滅びの場所である「火の池」に向かっている。私たち信者は、その滅びの道から救い出されたのである。
 - 義と認められる・・・私たちが罪人であったことと関係する表現。生まれながらの人は、全員が最初の人アダムの罪を引き継いで生まれる。罪の性質を宿した者として生まれてくるのである。そして、実際に罪を犯す。どんなに正しいことをしたいと思っても、人の義は、神の前に義人と認められるレベルには届かない。人は自分の行いによってではなく、神の恵みによってのみ救われると信じるなら、その信仰をもって神はその人を義人と認めてくださる。そして、その人は霊的に新しく生まれる。
 - ② 救いは、その人の行いによらず、神の恵みによって与えられる。救いを受け取るのに必要なのは、信仰である。神を信頼してその恵みを受け取るだけ、これを信じるという。
 - ③ 信じて救いを受けたなら、その人は、例外なく、霊的に新しく生まれている。
 - ④ 霊的に新しく生まれたから、霊的な生き方ができるようになったのである。

- 聖書が言う霊的な人になれるのは、信者だけである。
 - 信者でない人は、どんなに自分には靈感がある、霊能力があると言っても、聖書が言う霊的な人ではない。
- (2) 第二の要素は、聖霊
聖霊は、信者に霊的な生き方をするための力を与える。
- (3) そして、第三の要素は、時間
信者になってすぐに、霊的な人になるわけではない。成長して霊的な大人になるための時間が必要である。
3. 以上のことを、まとめると・・・
- (1) 「霊的（スピリチュアル）であること」を、一言で表現をするなら、「成熟」
- (2) 霊的な生き方、英語でいうと「スピリチュアル・ライフ」であるが、それが意味するのは、
【信者が、聖霊の助けを受けて霊的に大人になり、さらに円熟を目指して成長する】と、いう生き方である。
4. 福岡集会の2023年1月からのテーマ
霊的に生きるとは、具体的にどのような生活をすればよいのか。
そのときの生活ルールは何か。

□アウトライン

テーマは、信者の生活ルールとは何か。

結論から言うと、新約聖書時代に生きる私たちの場合、二つある。旧約聖書に記されている永遠の原則と、新約聖書に記されているメシアの律法である。

この学びでは、まず過去、旧約聖書時代における信者の生活ルール、次に将来、メシアの王国時代における信者の生活ルールを見る。そのうえで、現代の私たちに関係する生活ルールを見る。

これは、時代によってルールが変わることや、過去のルールを今に持ち込まないことなどを、理解するためである。

- I. 旧約聖書時代における信者の生活ルール
- II. メシアの王国における信者の生活ルール
- III. 現代における信者の生活ルール

I. 旧約聖書時代における信者の生活ルール

1. モーセの律法よりも前の時代

旧約聖書における生活ルールと言うと、私たちはモーセの律法を思い浮かべる。「十戒」を含めて全部で613の規定を持つと言われる律法である。旧約聖書の2番目の書である出エジプト記から、5番目の書である申命記にかけて、記されている。

しかし、モーセの律法よりも前の時代、すなわち旧約聖書の1番目の書である創世記の時代にも、神は人にルールを与えていた。

創世記の時代は、エデンの園の時代、良心の時代、人間による統治の時代、そして約束の時代の4つの時代に分けられる。

(1) エデンの園の時代におけるルール

罪に堕ちる前のアダムにすら、神はルールを与えていた（創世記2:15~17）

- ① エデンの園を耕し、守る。
- ② 園のどの木からでも思いのまま食べて良い。しかし、善悪の知識の木からは食べてはならない。その木から食べるとき、必ず死ぬ。

(2) 良心の時代におけるルール

罪に堕ちた後のアダムとエバに対しては、次のようなルールが与えられた（創世記3:16~19、創世記4:3~5、7）。特に⑦は、人は良心を働かせて正しい行いを選択していくことを求められているので、この時代を「良心の時代」と呼ぶ。

- ① 女は、月経で、苦しむ。
- ② 女は、苦しんで子を産む。
- ③ 妻は夫を恋慕うが、夫は妻を支配することになる。
 - 「恋慕う」と訳されているが、原意は「手を伸ばしてつかもうとする」。妻が夫を支配しようとする
- ④ 大地は茨とあざみを生えさせるので、男は一生の間、苦しんでそこから食を得る。顔に汗を流して糧を得る。
- ⑤ 人はついにその大地に帰る。土のちりに帰る（肉体の死）。
- ⑥ 神にささげる物は、血の犠牲である（創世記3:21、4:3~5）。
- ⑦ 良いことをしていないのであれば、戸口で罪が待ち伏せている。罪が人を恋慕うが、人はそれを治めなければならない（創4:7）。
 - 下線部の意味は、罪の性質が人を支配しようとする

(3) 良心の時代の結末は、洪水のさばき

良心の時代の結末は、人の失敗であった。

「地上に人の悪が増大し、その心に凶ることがみな、いつも悪に傾く」（創世記 6：5）、「地は神の前に墮落し、地は暴虐で満ちていた。神が地をご覧になると、見よ、それは墮落していた。すべての肉なるものが、地上で自分の道を乱していたからである」（創世記 6：11～12）

ここまで墮落した原因は、創世記 6 章 1～4 節の【悪霊たちと人の娘たちとの雑婚】であった。雑婚によって生まれた子たちは、「ネフィリム」という特殊な世代となったが、彼らは男ばかりで女はいなかった。悪霊たちを遣わしたサタンのは、目的は、「女の子孫」（創世記 3：15）であるメシアの登場を阻止することであった。

悪霊たちとの雑婚により汚された人類を、神は洪水によって滅ぼされた。洪水から救われたのは、ノアとノアの 3 人の息子たち、セム、ハム、ヤペテ、そしてそれぞれの妻 4 名、計 8 名だけであった。

3 人の息子たちから、その後の人類の諸民族が形成された。

(4) 人間による統治の時代のルール

神はノアたちに次のようなルールを与えた。特に④において、人間による統治制度の導入が定められたので、この時代を「人間による統治の時代」と呼ぶ。

- ① 生めよ。増えよ。地に満ちよ。（創世記 9：1、7）
- ② 人への恐れとおののきが、地の獣、空の鳥、地面を動くもの、海の魚に起こる、人の手に、これらは委ねられた。生きて動いているものはみな、人の食物となる。緑の草と同じように、そのすべてのものは、人に与えられる。＝肉食の許可（創世記 9：2～3）
- ③ ただし、肉は、そのいのちである血のあるままで食べてはならない。（創世記 9：4）
- ④ 神は、人のいのちのためには、人の血の価を要求する。人の血を流す者は、人によって血を流される。神は人を神のかたちとして造ったからである。（創世記 9：5～6）＝死刑制度の導入、法律の制定、裁判、人による統治制度
- ⑤ 【補足】「人間による統治の時代」は、イスラエル民族以外の諸国民にとっては、現代にまで続いている。それが終わるのは、大患難期の中間において、反キリストが世界を支配する時である。法による統治制度が破壊され、「不法の者」（Ⅱテサ 2：3）である反キリストが支配者となる。